

平成30年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報 第4号（7月予報）

発表日：平成30年6月27日

岩手県病害虫防除所

I 情報の要点

1 水 稲

- ◎**いもち病の発生は並の予報**ですが、気象条件により急激にまん延するので、今後の情報に注意し、圃場の観察と早期防除を最重点に万全の対策をとりましょう。
- ◎**紋枯病の発生がやや多の予報**です。近年、多発傾向ですので、前年発生が多かった圃場では防除を実施しましょう。
- ◎**斑点米カメムシ類（第1世代）の発生は並の予報**ですが、カメムシ類の増殖を防ぐため、畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道などでは、イネ科植物が出穂しないような管理を徹底しましょう。また、本田内雑草も発生源となるので、本田内の除草も徹底しましょう。

2 りんご

- ◎**褐斑病の発生がやや多の予報**です。前年多発園では、本病に効果の高い薬剤により防除を徹底しましょう。
- ◎**黒星病の発生がやや多（平年少発生）の予報**です。本年は多発している園地も見られますので、発生状況の把握に努めるとともに、発生が確認された場合には罹病葉・果実は摘み取り処分しましょう。
- ◎**ハダニ類の発生が多～やや多の予報**です。主幹近くの新梢葉（普通樹では主幹や主枝の徒長枝葉）をよく観察し、要防除水準に達した場合は直ちに防除を実施しましょう。
- ◎**果樹カメムシ類の発生がやや多の予報**です。園地への飛来状況に注意し、大量の飛来が確認された場合は、効果の高い薬剤により速やかに防除を実施しましょう。

3 野菜・花き

- ◎**きゅうりでは、褐斑病、炭疽病の発生がやや多の予報**です。予防散布を徹底するとともに、疑わしい病斑が見られたら摘葉を行い、まん延防止に努めましょう。
- ◎**キャベツでは、コナガの発生がやや多の予報**です。圃場内をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施しましょう。
- ◎**ねぎでは、べと病の発生がやや多の予報**です。降雨が続くと発生が助長されるので、定期的に防除を実施しましょう。
また、**ネギアザミウマの発生がやや多の予報**です。発生が目立つ圃場では、効果の高い薬剤を散布し、密度低下を図りましょう。
- ◎**りんどうでは、ハダニ類の発生は並の予報**ですが、多発してからでは防除が困難となるので、発生状況を観察し、発生初期に防除を実施しましょう。

【利用上の注意】

本資料に掲載した農薬は、平成30年6月13日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・農薬使用の際には、(1)使用基準の遵守(2)飛散防止(3)防除実績の記帳 を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス <http://i-agri.net/Index>

II 農薬の安全・適正使用

- 1 岩手県では、6月1日から8月31日までを農薬危害防止運動月間と定め、農薬の使用や販売に関する正しい知識の普及・啓発をはじめとする各種の取り組みを実施しています。
- 2 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。特に、養蜂活動が行われている地域で水稻、大豆、りんごなどの作物に一齐に農薬を散布する場合は、養蜂家に散布時期を周知するなど、ミツバチの危害防止に努めましょう。

III 3ヶ月予報（7月～9月、仙台管区气象台、6月25日発表）

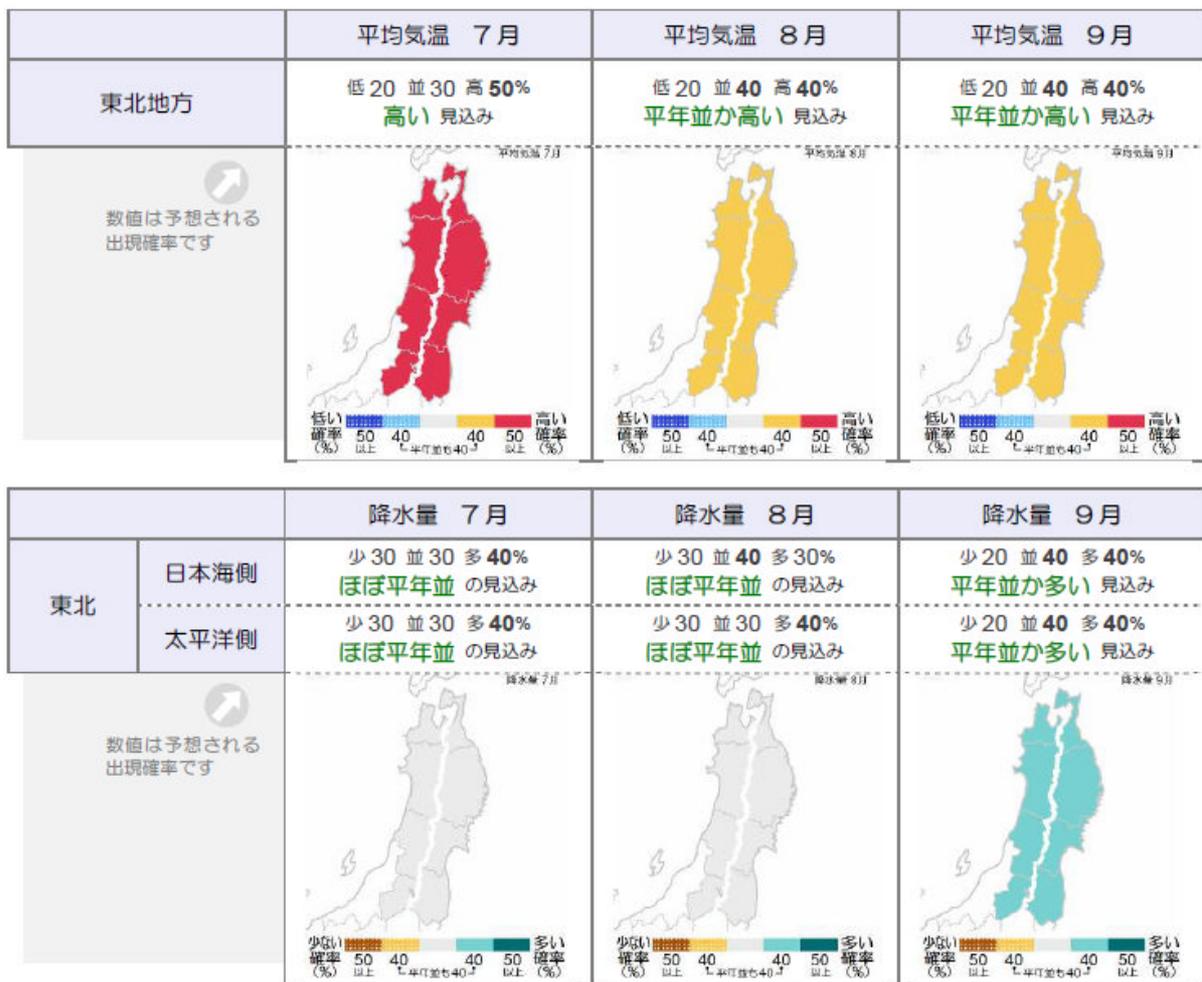
向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

7月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

8月 東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

9月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

月別の平均気温・降水量



図は仙台管区气象台ウェブサイト (<http://www.jma-net.go.jp/sendai/>) より引用

水稻病害

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
いもち病 (葉いもち)	—	並	(1) BLASTAMによる判定では、6月12日に県南部で感染好適条件が出現したが、以降は出現していない。(±) (2) 取置苗の放置は全県では減少傾向にあるが、本年も取置苗での発病が確認されている。(±) (3) 葉いもち予防剤の施用率が高い。(—) (4) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(+)
紋枯病	—	やや多	(1) 前年の発生量は平年より多かった。(+) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(+)
稲こうじ病	—	並	(1) 前年の発生量は平年並であった。(±) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(—)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(--)：重要な少発要因

2 防除のポイント

〇いもち病は、気象条件により急激にまん延するので、今後の情報に注意し、圃場の観察と早期防除を最重点に万全の対策をとみましょう。

【いもち病】

- (1) 発病した取置苗や本田持ち込み等の伝染源のある圃場とその周辺では、病勢の進展が速く、ずりこみ等大きな被害につながる事が多いので、取置苗、持ち込み発病があった地域は特に注意する。
- (2) 葉いもち防除
 - ① 予防剤（箱施用剤、水面・投げ込み施用剤）を使用した場合
予防剤を施用した場合でも、取置苗の放置圃場等では既に本田株で発病している場合がある。圃場を観察し、発生が目立ったら直ちに茎葉散布を行う。水面・投げ込み施用剤の処理が遅れた場合は特に注意する。
 - ② 予防剤を使用しなかった場合
圃場をよく観察し、発生を確認したら直ちに茎葉散布を行う。
- (3) 穂いもち防除
穂いもち予防剤の施用にあたっては、生育状況に注意し、防除時期を失しないようにする。葉いもちの発生が見られるところでは、粒剤施用前に茎葉散布剤で防除を行う。

【紋枯病】

- (1) 茎葉散布の場合：穂ばらみ末期（7月末～8月上旬）の発病株率が、早生種 15%、晩生種 20%以上の場合は防除を行う。
- (2) 粒剤施用の場合（前年多発圃場）：防除適期 出穂 25～15 日前 モンカット粒剤
出穂 20～10 日前 モンガリット粒剤（稲こうじ病にも効果有）
※いもち病防除剤との混合剤を使用する場合は、剤によって散布適期幅が異なるので注意する。

【稲こうじ病】

- (1) 前年多発した圃場を中心に防除する。特に、穂ばらみ期に雨天が続くと多発するので注意する。
- (2) 銅剤およびその混合剤の効果が最も高い。

【ばか苗病】

- (1) 圃場を観察し、発生を確認した場合は、株ごと抜き取って焼却または土中に埋めるなどして処理する。

水稻虫害

1 予報（7月）の内容

病虫害名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	第1世代 やや早	第1世代 並	(1) 有効積算温度から算出されるアカスジカスミカメ第1世代羽化盛期の予測は平年よりやや早く、7月の気温は高い予報。 (2) 6月中旬のすくい取り調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (3) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
コバネイナゴ	－	やや多	(1) 6月中旬のすくい取り調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
フタオビコヤガ (イネアオムシ)	－	第2世代 並 (平年少発生)	(1) 6月中旬のすくい取り調査では、第1世代幼虫の発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【斑点米カメムシ類】

- (1) カメムシ類の増殖を防ぐため、畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道などでイネ科植物が出穂しないような管理を徹底する。また、水稻の出穂15～10日前までに畦畔や水田周辺の雑草などを地域一斉に刈り取る。
- (2) 本田内にヒエ類、イヌホタルイ、シズイ等が発生している圃場では、これらの雑草がカメムシ類の発生源となり、薬剤防除の効果が十分に得られないので、本田内の除草を徹底する。

【コバネイナゴ】

- (1) 一般には防除は不要である。
- (2) 幼虫が多発している場合には、7月中旬頃までに畦畔と畦畔際2～3mの水田に薬剤を散布する。また、移動性が高いため、個々で防除すると他の圃場へ移入する場合がありますので、地域で一斉に防除する。

【フタオビコヤガ (イネアオムシ)】

- (1) 一般には防除は不要である。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。

りんご病害

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点落葉病	—	並	(1) 6月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より低かった。(—) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(+)
黒星病	—	やや多 (平年少発生)	(1) 6月後半の巡回調査では、複数の園地で発生が確認された。(+) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(—)
褐斑病	—	やや多	(1) 昨年の巡回調査での発生園地率は、平年よりも高く、6月後半の巡回調査では、昨年の多発園で発生が確認された。(+) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(--)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【黒星病】

- (1) 園地を見回り、発生が確認された場合は見つけ次第、発病葉（図1～3）や発病果（図4）を摘み取り、埋没させるなど適正に処分する。
- (2) 他病害との同時防除を兼ねて黒星病に効果のある予防剤を定期的に散布する。
- (3) 10日間隔を目安に定期的な薬剤散布を行う。散布ムラがないよう十分量を丁寧に散布する。降雨が予想される場合は、降雨前に散布を行う。
- (4) 落花10日後以降のE B I剤の散布は、耐性菌が発現する恐れがあるので行わない。
- (5) 他県では購入苗で黒星病の発生が確認された例があるので、苗木での発生に注意する。



図1 葉表の初期病斑



図2 葉表の病斑（病斑部は古くなると隆起する）



図3 葉裏の病斑



図4 果実病斑

【斑点落葉病】

- (1) 7月は本病が急増しやすい時期である。高温(25~30℃)、多湿を好み、感染から発病までの潜伏期間は短く、夏期のまん延は極めて急性である。天候に注意し、防除のタイミングを逃さず、予防散布に努める。
- (2) 本病は樹上部の枝の混み合った部位からまん延することが多い。特に夏期に発生する徒長枝は病原菌密度を高め、散布薬剤の到達を妨げるので、不要な徒長枝を剪除し、薬剤がかかりやすい樹形を維持する。
- (3) 多発が心配される園地ではイミノクタジン剤、ポリオキシシン混合剤、ロブドー水和剤など本病に効果の高い剤を用いる。なお、ポリオキシシン剤やロブドー水和剤は耐性菌を生じやすい薬剤であるので注意する。

【褐斑病】

- (1) スピードスプレーヤの巡回場所や片側散布の場所など薬剤の散布むらが多発要因となる。散布むらが生じないよう丁寧な薬剤散布を行うとともに枝葉が過繁茂にならないように管理する。
- (2) 早期発見のためには、主幹部近くの枝の込み合っている部位の果叢葉や新梢下位葉を観察する。園地の中でも薬液のかかりにくい所を中心にできるだけ多くの樹で観察する。
- (3) 葉に褐色の病斑が観察された場合や黄変葉が坪状に観察された場合は、これらの葉やその周辺の葉を観察し、本病の特徴である分生子層(黒色虫糞状の粒々)の有無を確認する。
- (4) 褐斑病の前年多発園では、7月中旬にトップジンM水和剤またはベンレート水和剤を特別散布する。なお、前回までにラビライト水和剤を使用した場合は、耐性菌回避のためにトップジンM水和剤およびベンレート水和剤を使用せず、ユニックス顆粒水和剤47を使用する。

【輪紋病】

- (1) 7月は輪紋病の果実感染が多くなる時期である。特に夏期が高温多雨で経過すると多発が懸念されるので、散布間隔が空かないよう注意する。
- (2) 枝への感染も6~7月に多く、若い枝ほど感染しやすいので、幼木や枝幹部への散布も丁寧に行う。

【炭疽病】

- (1) 散布間隔が空かないように注意し、輪紋病などと同時防除を行う。
- (2) 炭疽病の発病果は、二次伝染防止のため見つけ次第取り除き、埋没させるなどの処分を徹底する。

りんご虫害

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンゴハダニ	—	多	(1) 6月後半の巡回調査での発生園地率は、平年よりやや高かった。(+) (2) 7月の気温は、平年より高い予報。(+)
ナミハダニ	—	やや多	(1) 6月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並であった。(±) (2) 7月の気温は、平年より高い予報。(+)
キンモンホソガ	第2世代羽化時期 やや早	やや少	(1) フェロモントラップへの第1世代の誘殺盛期は、平年並であった。 (2) 7月の気温は、平年より高い予報。 (3) 6月前半の巡回調査での第1世代の発生園地率は、平年より低かった。(—)
シンクイムシ類	—	並	(1) 7月のモモシンクイガの被害果の発生は例年少ない。(—) (2) 7月の気温は、平年より高い予報。(+)
果樹カメムシ類	—	やや多	(1) クサギカメムシの越冬量が、例年より極めて多い地点があった。(+) (2) 6月後半の巡回調査での被害果の発生園地率は、平年より高かった。(+) (3) 6月第4半旬現在、集合フェロモントラップへの誘殺数は、平年並。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハダニ類】

- ハダニ類の要防除水準は寄生葉率30%である。主幹近くの新梢葉（普通樹では主幹や主枝の徒長枝葉）をよく観察する。なお、樹上部で多発している場合もあるので、樹上部の徒長枝葉も観察し、要防除水準に達した場合は直ちに防除を実施する。
- 薬剤の効果を高めるため、殺ダニ剤の散布7日前頃までには下草処理をしておく。
- 薬剤散布は樹上部までかかるよう十分量を丁寧におこなう。不要な徒長枝は散布ムラの原因となるので、早めに剪除し薬剤のかかりやすい樹形を維持する。
- 薬剤抵抗性ハダニの発現回避のため、同一系統の薬剤は1シーズン1回使用に限る。また、複数年を単位とした薬剤のローテーションを厳守する。

【キンモンホソガ】

- 6月下旬～7月上旬に新梢葉を観察し、発生が目立つ園地では防除を行う。

【シンクイムシ類】

- 7月は薬剤防除の重点時期であるので、散布間隔を空けないよう防除する。
- 交信攪乱剤設置園においてフェロモントラップへの誘殺や被害果が確認された場合には、ただちに薬剤防除を実施する。特に放任園が近くにある場合は発生源になるので注意する。
- 被害果は3日以上水漬けするなどの処理を徹底し、発生密度の低下に努める。

【果樹カメムシ類】

- カメムシ類の飛来は、園地周辺部の結果樹木（ヤマザクラ、キリ、クワ）や防風ネット等も同時に観察する。特に、例年被害の多い園地では、園地内をこまめに観察する。
- 大量の飛来が確認された場合は、効果の高い有機リン剤や合成ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤などの薬剤により速やかに防除を行う。ただし、合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類の異常多発や薬剤抵抗性害虫の発現などが懸念されるので行わない。
- 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

3 防除上の留意事項

養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。

きゅうり

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
べと病	－	並	(1) 前年秋期の発生圃場率は、平年よりやや高かった。(+) (2) 6月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(±) (3) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(－)
うどんこ病	－	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
斑点細菌病	－	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(－)
黒星病	－	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(－)
褐斑病	－	やや多	(1) 前年秋期の発生圃場率は、平年並であった。(±) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
炭疽病	－	やや多	(1) 前年秋期の発生圃場率は、平年より高かった。(＋) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
ワタアブラムシ	－	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- 7月前半はべと病、黒星病及び斑点細菌病、後半は炭疽病、褐斑病及びうどんこ病の予防散布を徹底する。
なお、炭疽病、褐斑病のまん延を防ぐため、疑わしい病斑が見られたら摘葉を行い、速やかに薬剤散布を行う。
- 7月中旬以降は、茎葉が繁茂してくるため、薬剤の散布ムラが生じやすいので、株全体の葉の裏表にムラなくかかるようにアーチの両側から散布する。

【べと病】

- 下葉や古い葉に発生しやすいので、敷わら等を行い雨滴による病原菌の飛散を防ぐ。また、発病を確認してからでは被害が大きくなるので予防散布に努める。

【うどんこ病】

- 葉裏や茎、側枝でまん延するので注意して観察し、発生が見られたら早期に防除を行う。特に、うどんこ病に抵抗性を持たない品種においては注意する。

【斑点細菌病】

- 降雨が続くと発生が助長されるので、発生初期に防除を徹底する。

【黒星病】

- 低温・多雨条件で発生が多く、生育初期に発生すると被害が大きいため、7月前半までの防除を重点的に行う。
- 発生後の散布では防除効果が現れにくいので予防散布に努める。
- 生長点や若い葉、幼果に発生しやすいので、そこへ薬液がかかるように丁寧に散布する。

【褐斑病、炭疽病】

- (1) 両病害とも、発生を確認してからでは防除が困難なので、予防散布に努める。
- (2) 初期の発病葉を摘葉後、両病害に効果の高いゲッター水和剤もしくはダコニール1000を散布する。

【モザイク病、ワタアブラムシ】

- (1) モザイク症状が激しい株は、早期に抜き取る。
- (2) ワタアブラムシの防除については、定植時に粒剤を施用していても効果が切れる頃なので、引き続き防除を行う。

3 防除上の留意事項

- (1) 薬剤は、耐性菌や薬剤抵抗性害虫の出現を回避するために、連用せずに異系統の薬剤をローテーションで使用する。

キャベツ

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
コナガ	－	やや多	(1) 6月の巡回調査では、幼虫の発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 7月の気温は、高い予報。(+)
モンシロチョウ	－	並	(1) 6月の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 7月の気温は、高い予報。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【コナガ】

- (1) 7月以降もコナガの発生は断続的に見られるため、定植時に薬剤処理をする。
- (2) 定植時に薬剤処理を実施した場合でも、圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。
- (3) 薬剤抵抗性個体の出現を回避するため、以下のことに留意する。
 - ①コナガは飛来性の害虫であり、ジアミド系殺虫剤の効果が低いコナガが本県に広く発生している可能性がある。このため、ジアミド系殺虫剤による防除を実施したにもかかわらず、コナガの幼虫が見られる場合には、他系統の薬剤により防除を実施する。
 - ②コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤、同一系統の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。また、ジアミド系殺虫剤の使用は1作型1回にとどめ、年間使用回数の削減に努める。

【ヨトウガ、ウワバ類、モンシロチョウ】

- (1) ヨトウガやウワバ類の幼虫は、成長するとともに食害量が多くなるので、若齢幼虫の発生が目立つ場合は、コナガ防除の際にヨトウガ、ウワバ類にも効果のある薬剤を選択する。
- (2) 7月以降はモンシロチョウの発生は断続的に見られ、寄生密度も高くなる。成長した幼虫は食害量が多くなるので、若齢幼虫の発生が目立つ場合は、コナガと同時防除を行う。

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	やや少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(一) (2) 7月の降水量は、ほぼ平年並の予報。(±)
べと病	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 7月の降水量は、ほぼ平年並の予報。(±)
黒斑病・葉枯病	-	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(±) (2) 7月の降水量は、ほぼ平年並の予報。(±)
ネギコガ	第2世代羽化始期早	並	(1) 有効積算温度から推定される第2世代の羽化始期は平年より早い。 (2) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (3) 7月の気温は、高い予報。(+)
ネギハモグリバエ	-	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 7月の降水量は、ほぼ平年並の予報。(±)
ネギアザミウマ	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【べと病、さび病、黒斑病、葉枯病】

- (1) 降雨が続くとこれらの病害の発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
- (2) 肥料切れすると発病しやすいので、適切な肥培管理に努める。

【ネギコガ】

- (1) 有効積算温度から推定される第2世代羽化始期は、県中南部では7月第1～2半旬(平年：7月第2～3半旬)、県北部では7月第3半旬(平年：7月第4半旬)である。

【ネギハモグリバエ】

- (1) ネオニコチノイド系殺虫剤を用いて防除する場合は、ネギアザミウマとの同時防除が可能である。

【ネギアザミウマ】

- (1) 圃場周辺、畦間の雑草除去に努める。
- (2) 発生が目立つ圃場では、効果の高いディアナSCやハチハチ乳剤を散布し、密度低下を図る。
- (3) 粒剤は効果発現まで数日要するので、成虫の寄生が目立つ場合や乾燥傾向の場合は茎葉散布を行う。
- (4) 茎葉散布は散布ムラが生じないように畦の両側から丁寧に行う。



図1 さび病(左)とべと病(右)の病斑

3 防除上の注意事項

- (1) 収穫期に近い作型では、使用基準に注意して薬剤を選択する。
- (2) QoI剤は、耐性菌の発生リスクが高いので年2回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。



図2 ネギアザミウマによる葉の被害

りんどう

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
葉枯病	—	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。(—) (2) 7月気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(+)
褐斑病	—	並	(1) 前年の発生量は平年並であった。(±) (2) 7月の降水量は、ほぼ平年並の予報。(±)
ハダニ類	—	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(—) (2) 7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 7月は、葉枯病、褐斑病、炭疽病の重点防除時期にあたるので、散布間隔が空かないようにする。
- (2) 褐斑病、炭疽病は発病後の薬剤防除が困難なので、予防散布を徹底する。

【葉枯病】

- (1) 降雨後の散布は効果が劣るので、週間天気予報を参考にして、降雨日前の散布を心掛ける。
- (2) 薬剤散布にあたっては、下葉や畦の内部にもよくかかるように散布する。
- (3) 弱小茎やこぼれ種から生じた茎葉は伝染源となるので抜き取り、土中に埋めるなどして処分する。

【褐斑病】

- (1) 前年発生が見られた圃場では、本年も発生するので、一次感染が起こる6月下旬から7月まで防除を徹底する。
- (2) 株仕立てが不十分であったり、風通しが悪い圃場では発生が多くなるので、適正な茎数に管理する。
- (3) 薬剤が到達しにくい下位葉や畦の内部、畦の北側など日当たりの悪い場所で発生が多く見られることから、薬液が株全体に十分かかるように散布する。
- (4) 被害の拡大と翌年の伝染源をなくすため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。

【炭疽病】

- (1) 初発生は6月下旬～7月上旬であり、いったん発生するとその後の薬剤散布では防除が困難なので、予防散布を徹底する。
- (2) 薬剤防除適期は側芽発生期であり、薬剤散布は7～10日おきに連続して行う。
- (3) 被害茎葉は、取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。
- (4) ニセアカシアは本病の伝染源になるため、圃場周辺にある場合は特に防除を徹底する。

【ハダニ類】

- (1) 多発してからでは防除が困難となるので、前年多発圃場や常発圃場では葉裏を観察し、発生初期に防除する。なお、散布時は葉裏に薬液が十分かかるようにする。
- (2) 赤色のカンザワハダニと体色の半透明なナミハダニが寄生するが、後者は特に見落としやすいので注意して観察する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) 雑草はハダニ類の発生源となるので除草し、圃場外へ運び出す。

【リンドウホソハマキ】

- (1) 被害が多い圃場では、今後も防除を継続する。
- (2) 被害茎は見つけ次第折り取り処分する（図1、2、3）。

【アザミウマ類】

- (1) りんどうの開花とともに成虫が飛来し増殖するので、蕾の着色が見られたら薬剤防除を行う。
- (2) 収穫が終了した品種が発生源となるので、収穫後の残花や不要な茎葉を折り取り、圃場外に持ち出す。折り取り処分が出来ない場合は、収穫前品種の薬剤防除とあわせて防除する。
- (3) 周辺の開花雑草はアザミウマ類の増殖源となるので、除草し圃場外へ運び出す。



図1 被害茎



図2 被害茎の着色と羽化孔

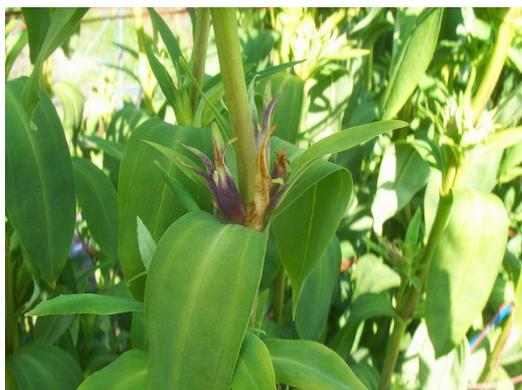


図3 被害花蕾の着色